

■公開授業週間が始まります [10/22(月)～11/9(金)]

10月26日(金)、教育課程実践モデル事業に関わる教員研修及び第2回運営指導委員会が行われます。これに先立ち、国語(矢上桂子教諭)、地歴公民(大屋えりか教諭)、数学(藤原弘晃教諭)、理科(南口哲也教諭)、保体(佐藤秀人教諭)、英語(緒方孝教諭)の研究授業が行われます。これまでの教育課程実践モデル事業の担当者を中心とした研究授業と違い、担当者以外の先生の研究授業となります。12月の第3回運営指導委員会の開催に合わせた研究授業では、さらに今回の先生以外の先生が授業をされる予定です。

この10月・12月の研究授業の際に実施しない先生は、2学期の授業公開週間を中心に、「主体的・対話的で深い学びの内容」を主とした授業をすることになっています。次に示すのがその一部です。全員が全員で授業改善に取り組み、切磋琢磨することで、生徒の学力向上につながればと思います。

教科	単元	主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)の内容
国語	評論文演習	自分の解答をグループで見合わせ、解答の根拠を話し合わせる。
国語	短歌	いくつかの短歌について、読まれた状況と作者の心情をグループで話し合う。
地歴公民	農業・食料問題	知識構成型ジグソー法の手法で授業を実施。エキスパート活動、ジグソー活動、クロストーク活動をとおして「日本の食料をどのように確保すべきか(輸入を促進すべきか自給率を高めるべきか)。」について思考・表現させる。
地歴公民	戦後秩序の形成	第一次世界大戦後に構築されたヴェルサイユ体制に、どのような問題点があったのかをグループワークで考察する。教科書の表現を、自分の言葉でしっかりイメージを持って表現できることをめざす。
地歴公民	鎌倉幕府の成立	幕府とは何か、何をもち鎌倉幕府成立となるか。話し合いを取り入れながら、考察を深める。
地歴公民	ケッペンの気候区分	ある都市についてのハイサーグラフを作図し、また、仮想大陸上の気候区分を判断することにより、世界の気候区分について理解の深化を図る。
地歴公民	社会の変動	ペアワーク、グループワークを取り入れながら、絵巻物等を題材に、中世鎌倉期の社会情勢を概観しながら、なぜ社会が変動したかその背景や原因を考える。
数学	複素数平面	1つの問題に対して、いろいろな別解(計算、図)を考える。ジグソー活動とおして思考を深めていく。
数学	最大値、最小値	一つの問いに対して、見方を変えると様々な解法があることをグループ学習を通して知る。同じ解答でも解釈の仕方があることを知る。
数学	場合の数と確率	少人数グループで、教科書を参考に確率に関する問題をつくり、別グループがそれに取り組む。問題を作る過程で知識の整理や発想力を養い、問題として表現をする。
数学	微分法	3次方程式の解と3次関数のグラフの関係を2次関数を元に考察していく。グループ活動を通して関連性について深く学ぶ。
数学	数列	群数列の考え方について、グループ学習を通して考える。
理科	アルコールと関連化合物	銅線を用いたメタノールの酸化反応によるホルムアルデヒドの生成実験を行う。実験結果をもとに、グループ学習、言語活動をとおして「メタノールの酸化反応における銅の役割」について思考・表現させる。
理科	肝臓	生徒同士の協働を主とし、教え合い学び合う授業を行う。
理科	単振動	「単振動の周期とおもりの数との関係」について思考し、実験による確認、結果についての考察を行う。
理科	運動の法則	生徒の実験結果をもとにどのような関係性が成り立つかを検証する。
理科	アルコール	実験結果をもとに、グループ学習を通じてアルコールの性質について考察する。
体育	バスケットボール	グループでの活動を行う。グループごとに練習や作戦を立てるなど自分たちの課題や取り組みを協力して行う。できればICT機器の活用も試みる。

■学校設定科目に関わって…

学校設定科目「EAST 地域探究」の導入を現在検討していることは、これまでも話してきました。この学校設定科目の導入にはどのような意義や価値があるのか、先月師範授業をしていただいた島根大学の中村准教授からご意見をいただきましたので、ここに紹介します。

「学校設定科目設置の価値について」

松江東高校で、「EAST 地域探究」という学校設定科目の設置を検討されているとうかがいました。これから内容の詳細を詰めていかれることと存じますが、生徒が探究的に学べる機会を更に得られることは、素晴らしいことだと思います。文部科学省が新学習指導要領で打ち出した学力の三要素は次の3つです。

- ① 生きて働く知識・技能（何を理解しているか、何ができるか）
- ② 思考・判断・表現（理解していることをどう使うか）
- ③ 学びに向かう力・人間性（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）

この中で最も注目を集めたのは、③でした。これまで学力として捉えられなかったものが新しい時代の学力観として捉えられるようになったからです。

日本では Google、Facebook、Amazon、Apple、Microsoft などの世界に革新をもたらしたような企業は誕生していません。アメリカでは次々こうした企業が出てくる一方で、日本には出てこないことについて嘆かれることも多いですが、一方で誇るべきこともあります。日本の教育水準は依然として世界トップレベルで、識字率などはほぼ 100% です。突出したイノベーターを生み出すことは出来なくても、1人1人の持っている基礎力は世界的にも非常に高い水準にあります。2015年に実施された PISA の調査でもアメリカの数学的リテラシーは 40 位。日本は 5 位です。国民の平均的な学力で見れば、日本のポテンシャルはアメリカに劣っているとは言えません。そうした中で、現在経済産業省が打ち出しているのが「50 cm 革命」という考え方です。1人1人が目の前の状況を少しずつでも、現状よりもより良いものにしていくことが出来れば、日本全体で見たときに大きく前進する可能性があります。これが日本型イノベーションだということです。

では、どうすれば未来を担う生徒1人1人が自分の持っている力を発揮して社会に関り、社会の状況を少しでも良いものにしていくことが出来るのか。これに関しては、口頭で「将来社会に貢献してください」といくら言われても出来ることではありません。実践的・経験的に社会に貢献する方法を学んでいく必要があります。認知心理学の研究で、学習することは状況に依存していて、学んだことを他の分野に転移して活用することは困難であることが明らかにされました。国語や数学で培った思考力をそのまま社会問題の解決に繋げることは難しいのです。そのため、社会をより良いものにしていく力を身に着けるためには、社会問題を実際に扱った問題解決型の学習をしていくことが有効になります。

島根や日本の将来を希望あるものにするためには、1人1人の持っているポテンシャルが発揮できるような教育環境の整備が必要になります。「EAST 地域探究」はその役割を担える科目なのではないでしょうか。

■コラム ～モチベーション 3.0～

「Society5.0」という、「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、人類5番目の第4次産業革命による社会が今耳目を集めています。この言葉を聞くと思い浮かべるのが、モチベーション 3.0 です。1.0 は「生きるための本能的な動機づけ」、2.0 は「アメとムチによる与えられた動機づけ」で、3.0 は「ワクワクする自発的な動機づけ」とされます。これは、ダニエル・ピンク著『モチベーション 3.0』（講談社、2010）による考えです。私たちは、2.0 に基づいて生活していることが多くあります。「給料をもらうために働く」、「いい大学いい会社に入るために勉強する」、「怒られるから遅刻しない」、「悪い点をとると恥ずかしいから試験勉強を頑張る」「優勝したいから練習する」などなど。多くの人が長い時間を過ごす場所（狭義には会社や学校、広義には社会）では、当然のように競争の原理が働き、また日本的な恥の文化の影響もあって、この「アメとムチ」の論理が作用します。

しかし、内面から湧き出るやる気に基づく「モチベーション 3.0」こそが、創造性を要する高度な知的業務に携わる現代の労働者には、アメとムチよりも重要な「やる気」の源泉になります。3.0 の特徴が三つの観点から著書では述べられていますが、それは「主体的・対話的で深い学び」とは何かを考える上で、とても参考になるものです。是非ご一読ください。